

和文化おもてなしプロジェクト

代表者 林 美玖 (経済学部地域社会システム学科 2 年)

1. 目的と概要

本プロジェクトは、香川県の外国人訪問客と県内在住の外国人に、英語による和文化体験イベントや高松駅周辺でのショートツアーを提供するものである。イベントやツアーの内容には、プロジェクト開始以前に高松駅周辺で行ったインタビュー、およびイベント後やインターネット上で実施したアンケートの結果を反映させるようにした。本プロジェクトは、以下の内容を目的としていた：(1) 参加型の和文化体験イベントを英語で提供することにより、通常の一方向型の観光とは異なる双方向型の観光モデルの構築を模索する；(2) 地元の方々から寄付された物品を、イベントで使用することにより、地域社会と外国人参加者との繋がりを創造する。

2. 実施期間 (実施日)

平成 30 年 6 月 21 日から 平成 31 年 3 月 31 日まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

(1) 和文化体験イベント

本プロジェクト期間のうち、計 3 回 (2018 年 6 月 4 日、8 月 20 日、2019 年 2 月 17 日)、英語による和文化体験イベントを実施した。地域の方からの協力で使用が可能になった、高松市内の古民家「楽翁庵」において、以下のような和文化体験イベント (着物体験、つまみ細工体験、茶道体験、日本の遊戯体験) を行った。イベント内容の詳細は、以下の通りである。

・着物体験

2018 年 5 月、メンバーの一人が、かがわ長寿大学の受講生に向けて、家庭で不要になっている着物の寄付を募った。その結果、同大学受講生の 2 名から約 40 点の着物や和装小物の寄付があった。イベント内では、このように寄付された着物や和装小物を参加者に見せ、選んでもらい、メンバーが着せ付けを行った。体格の大きい参加者にも合うように、サイズの小さい着物は、メンバーが解いて布を継ぎ足すなどの工夫をした。現在、参加者が自身のコーディネートイメージしやすいような、着物カタログを作成している段階である。同カタログには、各着物がどのような経緯でプロジェクトの元に送られてきたのか、また、どのような地域の思い出が詰まっているのかについて説明した英文も挿入する予定である。このように、地域の方々から寄付された着物を外国人参加者に身に纏ってもらうことで、間接的ではあるが、地域社会と外国人参加者を繋ぐことができたのではないかと考えている。

・茶道体験

現在、様々な観光地等で行われている茶道体験の多くは、参加者が客人としてお茶を飲

むということに焦点が当てられている。確かに、このような茶道体験を通して、外国人観光客は気軽にお茶の文化に触れることができるかもしれない。しかし、このような一方向型の茶道体験では、お茶の味についての感想が残るだけで、本プロジェクトが重要視しているコミュニケーションをベースとした和 문화体験を提供することができないのではないかと考えた。よって、本プロジェクトでは、参加者自身に抹茶、茶碗、茶筌を配布し、メンバーも一緒になってお茶を点てるという茶道体験を提供した。まず、プロジェクト・メンバーがイラストを基に、茶道体験の一連の流れについて英語で説明した。その後、参加者に対してメンバーが茶筌の動かし方を示しながら、一緒にお茶を点てた。

このように、メンバーが参加者と一緒に作業を行うことで、参加者側とメンバー側の垣根を取り払い、より人と人の繋がりが感じられるような和 문화体験にすることができた。また、茶道体験において使用した茶器も、地域の方から寄付されたものである（FM 香川で紹介された、本プロジェクトの活動内容を知った視聴者から寄付された約 10 点の茶器や掛け軸等が含まれる）。

今年度は、茶道体験の作業内容に焦点を当てた説明を行ってきたが、今後は、地域社会と外国人参加者との繋がりを、より視覚的なものにするために、茶器を譲り受けた経緯、茶器の特徴、地域社会における茶道の歴史・位置づけについての説明も追加していく予定である。

・つまみ細工体験

つまみ細工とは、江戸時代から続く伝統工芸の一つであり、現在でも国内で高い人気を誇っている。これは、一越ちりめんを「つまみ」ながら、花などのモチーフを作成するもので、ストラップ、髪飾り、ブローチなど様々なアクセサリとしても使用されている。

つまみ細工を選んだ理由は 3 つある。1 点目は、つまみ細工を通して、和 문화とともに環境に対する意識についても伝えることができると考えたことである。そもそも、つまみ細工とは余り布の切れ端を利用するところから発展した。本プロジェクトが、地域社会から寄付された不要だが思い出が詰まった着物を和 문화体験で活かしたように、つまみ細工体験では、布の切れ端が少しの工夫でアクセサリへと生まれ変わる過程を外国人参加者に示すことができた。今後は、観光資源だけではなく、和文化を通じた様々な地域資源（資源作物や工芸品を含む）についても調査する契機としたいと考えている。2 点目は、つまみ細工の視覚的効果である。カラフルな布で作られたつまみ細工は、特に若い参加者の関心を引きやすく、プロジェクトの宣伝効果になるのではないかと考えたからである。3 点目は、軽量であるため、イベント後に参加者が容易に持ち帰ることができるというプラクティカルな理由である。今年度の和 문화体験イベントにおいては、梅の花をモチーフとしたストラップを参加者とともに作成した。まず、参加者に好きな色や柄の布を必要数枚選んでもらい、その後、メンバーが作り方の説明を、図を用いて説明した。メンバーは参加者の隣に座り、参加者が困った際にはすぐに手助けをできるようにした。

今後は作成するつまみ細工のヴァリエーションを増やすだけでなく、地域資源を利用するなど、より地域社会に根ざした内容にしたいと考えている。

・日本の遊戯体験

2019 年 2 月 17 日の和 문화体験イベントでは、百人一首を用いた遊戯の一つである「坊主めぐり」を行った。これは、文字ではなくイラストを見て遊ぶことができるため、外国人参加者にとっても分かりやすい。一回切の体験ではなく、参加者がルールを覚えられるように、何回か繰り返した。また、単に繰り返すだけではなく、回数を重ねるごとに遊びのルールに少しずつ変化を加えていくなど、参加者がより楽しめる工夫をした。また、メンバーも遊び方を教えるだけでなく、交代で坊主めぐりに参加した。このような相互参

加型の活動の効果は、参加者とメンバーという垣根を隔てたコミュニケーションではなく、より繋がりを感じられるようなやり取りができたと考えている。今後は、地域に伝わる外国人参加者が理解しやすい遊戯についても調査し、地域文化の一端を伝えられるような遊び体験を提供できればと考えている。



2018年8月20日
和文化体験イベント（古民家楽翁庵にて）



2019年2月17日
和文化体験イベント（古民家楽翁庵にて）

（2）関西圏への視察

・関西外国語大学通訳ガイドクラブとの交流

2018年9月21日、毎月清水寺のボランティアガイドを行っている関西外国語大学通訳ガイドクラブの活動を見学し、練習に参加した。同クラブでは、学生たちが主体で、英語練習の内容を組み立てていた。例えば、一番記憶に残っているガイドについて一人ずつ英語で発表し、その後、外国人観光客ガイドとして重要なことをグループ内で議論する、などである。また、学生ガイド役と外国人観光客役とに分かれて英語を話すなど、ロールプレイ形式の練習が行われていた。

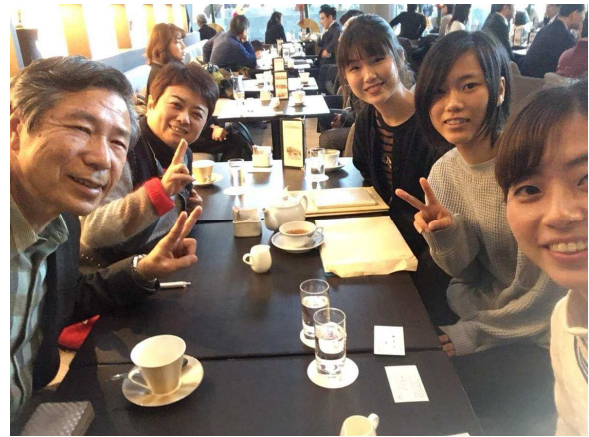
同クラブの練習方法を参考にしながら、本プロジェクトでもイベントやツアーを想定した、ロールプレイ型の実践的な英語練習を行った。例えば、事前にツアーで案内する場所の写真や、案内するルートを動画で撮影しておき、その写真や動画を見ながら建造物などの説明をした。これにより、練習するなかで気がついた改善点や、より良い案内方法が見いだせ、本番では外国人参加者にとって、更に分かりやすい説明を行うことができた。

・京都フリーガイドの方々へのインタビュー

2019年1月13日、ホテルグランヴィア京都にて京都フリーガイドの代表と総務の方へインタビューを行った。同団体は、2012年に活動を開始して以来、様々な国や年齢の観光客へのガイドを行っている。まず、京都フリーガイドの方々から学んだこととは、外国人観光客の目線に合わせる、という点である。例えば、ガイドを進行するペースは、外国人観光客のバックグラウンドにより変える必要がある。外国人観光客といっても、必ずしも英語がネイティブであるとは限らないし、歩行速度も年齢などにより大きく異なる。自分たちが、ツアーを実施するときにも、相手の立場になってツアーを組み立てることが重要であると再確認することができた。ほかにも、京都フリーガイドの方々には、外国人観光客が理解しやすいように、視覚的な工夫をしていることが分かった。例えば、観光地を案内する際、口頭では伝わりづらい日本語の固有名詞などは、紙にローマ字で書いたものを見せている。確かに、英語がネイティブではない外国人観光客もいるため、今後はインタビューで得られた情報を参考に、観光地の歴史を説明する際には、スケッチブックに絵や字を書いていき、紙芝居のような形式で説明するなどの工夫を施していこうと考えている。



2018年9月21日
関西外国語大学通訳ガイドクラブとの交流



2019年1月13日
京都フリーガイドへのインタビュー

・英語による和文化体験の観察

京都のような都市部の観光地において、どのように外国人観光客に対して和文化体験が提供されているのかについて調査するために、自分たちが外国人観光客の気持ちになって、2つの異なる機関において和文化体験サービスを受けた。これを通して、サービスや技術の水準を理解するほか、メンバーが気づき得なかった、サービス上の工夫を発見することを目的としていた。

◎京都コンシェルジュサロンにおける和文化の体験と参与観察

2018年9月21日、旧武家屋敷で外国人観光客に和文化体験を多言語で提供している京都コンシェルジュサロンを訪れ、英語による茶道体験を受けた。ここでは、単に参加者にお茶を提供するだけでなく、茶道の手順や歴史が簡潔に書かれた紙を渡すなど、重要な情報が理解しやすいように視覚化されていることが分かった。また、その用紙は、参加者が持ち帰れるようにしており、外国人観光客が帰国後も茶道体験を思い出せるような工夫もなされていた。ほかにも、茶道についての説明は、外国人観光客が正座でいる時間を考慮して組み立てられていた。確かに、本プロジェクトの和文化体験時にも、外国人参加者が正座で苦労している場面が何度か見受けられた。

今後は、正座の時間だけでなく、正座ができない参加者も考慮した空間の作り方が必要であると感じた。同サロンにおける視察を活かして、本プロジェクトでの茶道体験では、まず茶道体験の手順の視覚化に取り組んだ。今後は、外国人参加者が持ち帰ることができるような、意匠をこらした説明書を作成することを計画している。

◎着物レンタル VASARA における和文化の体験と参与観察

2019年1月13日、同所にて、着物体験と英語による茶道体験のサービスを受けた。着物体験で用いられていた着物は、参加者が外出することを想定し、化繊でできたものが多かったが、色や柄などは幅広い年齢層に対応できるようになっていた。本プロジェクトで用いている着物は、地域からの寄付をベースとしているため、素材や色、デザイン、サイズ等の点では参加者のニーズに対応しきれていないという問題点がある。一方で、古いが上質の素材の使用という点と、地域に支えられた着物体験という点では、このような観光地のサービスと本プロジェクトは差別化できると感じる事ができた。着物のヴァリエーションという点では、今後も地域社会に寄付を呼びかけ続ける必要があると考えている。また、サービスとして提供をしている着物の着付けでは、帯の結び方やヘアアレンジな

ど、細部にわたるまで、参加者に選択肢を与えることができていることに気づいた。本プロジェクトでは、プロのような着せ付けを目指しているわけではないが、練習次第では、帯の結び方等に工夫を施すことができると考えている。また、参加者が一方的に着物を着せられる、というスタイルではなく、一緒に着物を着るという参加型のイベントにすることもできるのではないかと、今後の活動へのヒントを得ることができた。

更に、英語による茶道体験でも、茶道についての説明の流れに工夫がみられた。例えば、茶道体験の一連は、概要・歴史の説明、デモンストラーション、実践の3部構成になっており、参加者が段階を経て茶道を理解しやすいようにできていた。本プロジェクトでも、参加者が理解しやすい茶道体験を目標に、今後は茶道の創始者である千利休や茶道具を絵で示しながら説明するなど、茶道体験ワークショップの改善を行いたいと考えている。



2019年1月13日 茶道体験

(3) 英語定期練習

本プロジェクト期間中は、毎週木曜日にメンバー間でイベントや高松駅周辺のショートツアーを想定した英語の練習を行ってきた。つまみ細工や着物の部位など、和文化体験イベント時に必要な単語を各自で調べ、メンバー間で意見を交わしながら、より妥当な会話表現を模索してきた。このような実践練習を行うことで、和文化体験時には、外国人参加者が理解しやすいような説明をすることができた。

また、定期練習では、ツアーや和文化体験時に必要な英語練習だけでなく、日常会話の練習も行った。というのも、実際のイベント時は一方向型の説明だけではなく、参加者と円滑なコミュニケーションを取る必要があるからである。メンバー同士での英語の練習は、定期的に指導教員にチェックをしてもらい、それを各自が自主練習をするなど改善を重ねた。その成果もあり、イベント当日には参加者とスムーズに会話することができた。また、会話練習時には、メンバー同士がペアになり、話している様子を互いに動画で撮影するようにした。録画物を各自が客観的に分析することで、話している間には気づかないような自分の癖や間違いに気づきやすくなるなど、効果的な自主練習をすることができたと考えている。今後は、これまでの練習内容に加えて、十分に取組むことができなかった災害などの緊急時に対応できるような英語表現の練習も重点的に行っていく予定である。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

(1) 本学に与えた影響

本プロジェクトが香川大学に与えた影響は、(1) 地域の中でグローバルな試みを行う学生団体モデルの提供と、(2) 学生が主体となった、留学生と日本人学生との交流の促進、の2点であると考えられる。本プロジェクトでは、英語を用いて外国人観光客や香川県在住の外国人に和文化体験イベントやツアーを実施してきたが、これらは地域社会の協力があってこそ可能になった活動である。地域住民から寄付されたものを、外国人参加者にも利用してもらうことは、単なる資源の循環ではないと本プロジェクトでは考えている。むしろ、学生という存在を通じて、地域とグローバル社会をより人間的な方法で繋ぐ過程

の一端を、本プロジェクトは担うことができているのではないかと考える。また、2点目は本学の学生の国際意識とも関係している。本学には、毎年多くの留学生が来ているが、特定の学生間のみでの交流となってしまう傾向は否めない。しかし、本プロジェクトは、メンバーが留学生対象のクラスに出かけたり、広報誌 KADAIGEST でも紹介されたりしたこともあり、留学生間にもその存在や活動内容を知ってもらうことができた(実際に、多くの留学生が本プロジェクトのイベントやツアーに参加した)。

今後は、留学生にもプロジェクト・メンバーとして参加してもらうなど、より一層、学内での国際交流が促進されるような活動にしたいと考えている。このような本プロジェクトの活動は、留学生や地域住民の口コミでも広がっており、既に学外からは、2019年の5月と6月にイベント実施の依頼を受けている。

(2) 地域社会等に与えた影響

本プロジェクトが地域社会に与えた影響は、(1) 地域住民に対する、香川県の抱えるインバウンド観光の問題意識の提起と、(2) 香川県に在住する外国人や、本学の留学生と地域社会を繋ぐ機会の創造、の2点であると考えている。和文化体験イベントを実施する際は、そのチラシを高松市内のゲストハウスや公共交通機関などに設置した。これにより、香川県におけるインバウンド観光への問題意識を再認識した上で、地域の方々に協力を仰ぐことができた。実際に地域の方々からは茶道具や着物が寄付されており、本プロジェクトが学外の方々の理解と支援から成り立っていることが実感できた。

使用されなくなったこれらの物品を私たちの活動で使用することで、寄付をした地域の方々にも本プロジェクトの取り組みを通して、香川県における外国人との関わりに関心を集めることができたと考えられる。活動で得た学びをイベントやショートツアーにて参加者に還元することで、限られた範囲ではあるが、外国人と地域社会とを結びつけることができたといえる。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

イベントを企画するにあたり、香川県の外国人訪問客に対しインタビュー及び、アンケート調査を行った。これは、社会調査法を学習し、実施する機会となっただけではなく、民間企業との連絡の取り方や関わり方など、社会的スキルを向上する契機ともなった。学外の企業や個人と連絡をする際には、メンバー間で予めメールの文面や電話内容を検討し、指導教員のチェックを受けるという過程を経るようにした。これにより、メンバーそれぞれが責任を持った言動をとることを意識できたように感じている。また、外国人参加者との円滑なコミュニケーションをとる上で、英語運用能力の向上の必要性も感じた。週に一回の定期英語練習に加えて、自主的に学内にあるイングリッシュカフェなどで、英語に触れる機会を増やした。

今年度の活動を通して、メンバー間のやり取りはもちろん、地域社会と連携し、より良いプロジェクト運営をしていくにはどうすればよいのかを模索することができた。また、同様の取り組みを実施している団体への視察や学外の方々とのやり取りを通じ、これまでの運営上の経験を生かしたプロジェクト活動に対するアイデアなど、学生の視点とは違った捉え方を知ることができた。このように、学内にとどまらず、学外の方々からの刺激を受けることや広い視野を持つことは、今後社会に出ていく際に有効になると考えられる。

6. 反省点・今後の展望(計画)・感想等

(1) 反省点

本プロジェクト活動における反省点は、以下の4点である。

①英語能力の更なる向上

ツアーやイベントを想定した英語練習を行ったため、一方向型の英語の説明はスムーズにできた。しかし、即興的な会話においては、何度も言い直しをしたり、表現がまわりくどくなったりしてしまうことが多々ある。参加者と深いコミュニケーションを取るためには、メンバーそれぞれが、もっと英語能力を高めていく必要がある。

②アンケート内容の細分化

現在、各イベントの終了時には、参加者に満足度をたずねるようなアンケートを英語で実施している。しかし、その内容は、香川県に対する意識調査が主となっており、自分たちの英語スキルや、和文化体験についての満足度を詳細に問うような内容とは言えない。今後、外国人参加者の目線でイベントを実施していくためには、満足度を計量化するだけではなく、どのような質問項目が必要かメンバー同士で再検討する必要があると考えている。

③広報・集客方法の改善

イベントの際にはチラシを作成、国際交流会館アイパルや高松市内のゲストハウス、ホテルなどに設置したが、効果的な集客には繋がらなかった。これは、短期滞在型の外国人観光客が多く、イベント開催日とのずれがあったためだと考えられる。また、SNS（Facebook, Twitter, Instagram）を通じた広報活動も行ったが、更新頻度にムラがあったのが反省点である。今後は、イベントに関心を持ってもらえるような内容で、より頻繁に更新を行う必要がある。また、参加者が当日キャンセルをすることも多々あった。このような事態を防ぐために、今後はキャンセル時の手続きを、参加受付メールに記載するなど、参加者に確実に伝えられるように配慮する必要があると感じている。

④タイム・マネジメントの徹底管理

タイム・スケジュールを作成していても、本番当日には想定外のことが起こるなど、順調に行かないことがあった。今後は、和文化体験の練習や流れを確認するリハーサルを念入りに行う必要があると考えている。また、イベント当日においては、自分だけではなく、他のメンバーの行動や全体的な流れを全員が把握しなければならない。今後は、時間に余裕を持たせたタイム・スケジュールを作成し、全員で読み合わせをしたうえでリハーサルをするなど、よりスムーズなイベント進行ができるように工夫していきたい。

（2）今後の展望

今年度は、和文化による「おもてなし（OMOTENASHI）」をテーマに活動してきた。実際の活動では、双方向型の体験イベントを企画してきたが、「おもてなし」という表現を使うことで、自分たちと参加者との間に薄い壁があるようにも感じてきた。来年度は、そこからさらに一步踏み込み、「おともだち（OTOMODACH）」をテーマとした、より人間的なやり取りをベースとした活動にしたいと考えている。従来の高松市の古民家で和文化体験イベントを開催するという活動だけではなく、今後は、活動範囲を香川県内の他の地域へと外国人参加者と一緒に出掛けていくという活動も加えていく予定である。その際には、各場所で地域の方々と連携し、地域の歴史や産業と関連した内容のツアーやイベントを企画していきたいと考えている。そのために、現在、三豊市の地域資源や歴史について調査中で、2019年3月22日には志々島へと、メンバー有志で視察を行った。

また、今後の集客のためには、本プロジェクトの知名度を上げていく必要がある。和文化のワークショップを開催したり、地元企業において、プロジェクト活動のプレゼンター

ションを行ったりするなど、新たな対策を練っていきたい。

(3) 感想等

イベントを企画するにあたり、広報・集客や民間の人たちとのやり取りの難しさ、また英語で和文化を伝える際の知識のなさを実感した。自分たちの見通しの甘さを実感する局面も多々あった。しかし、プロジェクトで実感したのは困難さだけではない。和文化を伝えるなかで、外国人参加者とコミュニケーションを取り、自分が話した内容に興味をもってもらった際は、とても嬉しかった。また、普段の英語練習や、茶道や着物の着せ付けの練習を本番で活かし、参加者の笑顔を似ることができた時には、やりがいも感じた。関西圏での視察で学んだことも活かしながら、これからより充実した活動をしていけるよう励んでいきたい。

7. 実施メンバー

代表者	林 美玖	(経済学部 2年)		
構成員	赤崎 夏子	(経済学部 3年)	尾山 絢菜	(経済学部 3年)
	田中 美樹	(経済学部 3年)	大森 皓太	(経済学部 2年)
	廣畑 日向子	(経済学部 2年)	那須 幸音	(教育学部 2年)
	岡林 由里子	(経済学部 1年)	安井 万葉	(経済学部 1年)

8. 執行経費内訳書

配分予算額		163,000円		
執行経費(品目等)	数量	単価(円)	金額(円)	備考
抹茶茶碗	8	710	5,680	
茶筌	5	2,830	14,150	
茶杓	1	1,512	1,512	
一越ちりめん	2	1,190	2,380	
手芸用ボンド	1	480	480	
ストラップのパーツ	3	445	1,335	
ビーズ(金色)	1	375	375	
ピンセット	8	196	1,568	
カッティングマット	2	546	1,092	
定規	1	80	80	
ロータリーカッター	2	1,725	3,450	
腰紐	5	556	2,780	
襦袢(女性用)	4	3,000	12,000	
半襦袢(男性用)	2	3,320	6,640	
名刺用紙	2	528	1,056	
関西外国語大学視察	2	6,390	12,780	
京都視察	3	7,013	21,040	
セミ光沢紙	3	1,404	4,212	
光沢紙	2	1,533	3,066	
ポリ袋	1	420	420	
着物クリップ	2	1,440	2,880	
一越ちりめん	2	1,550	3,100	

衣装ケース	2	2,160	4,320	
半襦袢（男性用）	4	3,330	13,320	
防虫剤	5	530	2,650	
棗	1	1,550	1,550	
懐紙	1	850	850	
つまみ用袋	2	510	1,020	
ボールペン	1	102	102	
バインダー	10	410	4,100	
ハードディスク	1	8,040	8,040	
SDカード	2	2,700	5,400	
女性用襦袢	2	6,180	12,360	
セミ光沢紙	1	1,220	1,220	
クリアホルダー	1	474	474	
襟芯	4	910	3,640	
一越ちりめん	1	1,860	1,860	
合 計			162,982	